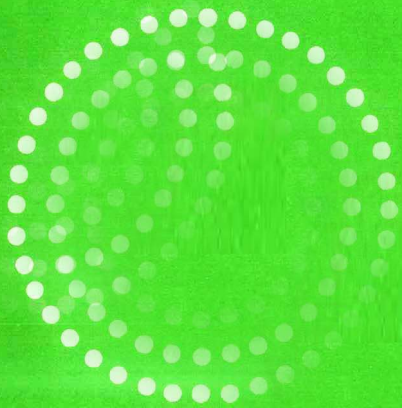
日本の詩集　6

室生犀星詩集



昭和四十三年十月十日　初版発行
昭和四十七年六月二十日　五版発行

著作者　室生犀星（むろうさいせい）
発行者　角川源義
発行所　角川書店
東京都千代田區富士見二ノ十三
㊞東京一九五二〇八　㊞一〇二
電話東京（265）七一一（大代表）

日本の詩集　6
室生犀星詩集

印刷カラー　暁美術印刷株式会社
本文　中光印刷株式会社
函・扉　暁美術印刷株式会社
製函　川合紙器加工所
製本　株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0392-571906-0943(1)

目次

詩集　抒情小曲集

一部

小景異情　一〇
旅途　一三
京都にて　一四
流離　一五
寺の庭　一六
足羽川　一七
犀川　一八
みやこへ　一九
寂しき春　二〇
利根の砂山　二一
氷の扉　二三
蛇　二三

二部

時無草　二四
永日　二五
小曲　二六
月草　二七
しら雲　二八
十一月初旬　二九
十一月初旬　三〇
くらげ　三一
霜　三二
樹をのぼる蛇　三三
砂丘の上　三四
秋思　三五
わかれ　三六
雪くる前　三七
秋の終り　三八
大乗寺山にて　三九

三部

都に帰り来て　四〇
蟬頃　四一
上野ステエション　四二
苗　四三
室生犀星氏　四四
坂　四六
断章　四八
酒場　五〇
あさぞら　五一
寂しき椅子　五三
合掌抄　五三

抒情小曲集　補遺

銀行街　五六
雨中佇立　五七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あさくさ　六八
詩集　青き魚を釣る人
春の寺　六〇
春の入日に　六一
朱の小箱　六三
逢ひて来し夜は　六三
断章　六四
欅　六五
青き魚を釣る人　六六
五月　六七
氷菓　六八
洲崎の海　六九
ある秋の午後　七一
雪くる前　七三
栗売　七三
青草に坐す　七四
深更に佇ちて　七六
詩集　鳥雀集
鳥雀のいとなみ　八〇
急行列車　八一
海　八三
扉銘　八四
詩集　十九春詩集
さくらうぐひにそへて　八六
詩集　愛の詩集
はる　八八
桜咲くところ　八九
万人の孤独　九〇
未完成の詩の一つ　九一
永遠にやつて来ない女性　九三
雨の詩　九四
愛あるところに　九五
大学通り　九六
ある街裏にて　九七
冬の霊魂　九九
鷲の詩　一〇〇
門　一〇二
詩集　第二愛の詩集
小さい家庭　一〇六
郊外の春　一〇九
音楽会の後　一一〇
安息日　一一一
「本」　一一三

山間の旅舎　一二四
初めて「カラマゾフ兄弟」を読んだ　一二五
晩のこと　一二七
祝福されるもの　一二八
みな休息して　一二九
草原　一三〇
感想詩
詩集　寂しき都会
亀　一三三
地に燃える　一三六
竹を植ゑる　一三九
寂しき印度人　一三三
詩集　星より来れる者
我庭の景　一三六
都会の川　一三八
田舎　一四〇
鮎のかげ　一四三
詩集　田舎の花
藁にまみれた花　一四六
枇杷の花　一四七
青い花　一四九
不思議なる顔　一五一
詩集　忘春詩集
ふいるむ　一五四
馬守真　一五五
象　一五六
桃の木　一五七
笛　一五八
溜息　一五九
夜半　一六〇
靴下　一六一
我が家の花　一六二
あきらめのない心　一六三
童子　一六四
おもかげ　一六五
緑のかげに　一六六
鯉　一六七
樹を眺む　一六八
駱駝　一六九
垣にそひて　一七〇
詩文集　高麗の花
夕餉のしたくはまだできぬか　一七四
菊を彫る人　一七六

茶の花　一七八
高麗の花　一八〇
小鳥を食べる　一八三

詩集　故郷図絵集

神々　一八六
松が枝に　一八七
赤飯の草　一八八

詩集　鶴

切なき思ひぞ知る　一九〇
何者ぞ　一九一
埃の中　一九二
彼と我　一九三
情熱の射殺　一九四
友情的なる　一九五
砂塵の中　一九六
己は思ひ出す　一九七
あさぜみ　一九八

詩集　鉄集

剣をもつてある人　二〇〇
ノッソリと立つ者　二〇一
僕は考へただけでも　二〇三
赤腹　二〇三
税関　二〇四
石段の感情　二〇五
椎の葉　二〇六

詩集　哈爾浜詩集

旅順　二〇八
杏姫　二〇九
荒野の王者　二一〇
君子の悲しみ　二一一
君子の悲しみ　二一三

詩集　いにしへ

み寺　二一四
帰去来　二一五
白砂　二一六

詩集　日本美論

雀　二一八
人は晩に　二一九
傾く家　二二〇

詩集　旅びと

月夜　二二四

大鳥　二二五
信濃　二二七
歌手　二二八
野のもの　二二〇
女ごのための最後の詩集
けふといふ日　二二四
みなあれから　二二五
わかい歯といふもの　二二六
日没　二二七
誰かをさがすために　二二八
好きならしかたがない　二二〇

解説
評伝　井上靖　二二二
鑑賞　吉田精一　二五〇
詩の旅　大竹新助　二六七
年譜　二六九

写真協力　行田哲夫・原弘男・前田真三・御園直太郎・緑川洋一
横山宏・オリオンプレス・角川書店写真部

室生犀星詩集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

詩集

抒情小曲集

一部

小景異情

その一

白魚はさびしや
そのくろき瞳はなんといふ
なんといふしをらしさぞよ
そとにひる餉(げ)をしたたむる
わがよそよそしさと
かなしさと
ききともなやな雀(すずめ)しば啼(な)けり

その二

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの

よしや
うらぶれて異土の乞食となるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに
ふるさとおもひ涙ぐむ
そのこころもて
遠きみやこにかへらばや
遠きみやこにかへらばや

その三

銀の時計をうしなへる
こころかなしや
ちよろちよろ川の橋の上
橋にもたれて泣いてをり

その四

わが霊のなかより
緑もえいで
なにごとしなけれど
懺悔の涙せきあぐる

しづかに土を掘りいでて
ざんげの涙せきあぐる

その五

なににこがれて書くうたぞ
一時にひらくうめすもも
すももの蒼さ身にあびて
田舎暮しのやすらかさ
けふも母ぢやに叱られて
すもものしたに身をよせぬ

その六

あんずよ
花着け
地ぞ早やに輝やけ
あんずよ花着け
あんずよ燃えよ
ああ　あんずよ花着け

旅途

旅にいづることにより
ひとみあかるくひらかれ
手に青き洋紙は提げられたり
ふるさとにあれど
安きを得ず
ながるるごとく旅に出づ
麦は雪のなかより萌え出で
そのみどりは磨げるがごとし
窓よりうれしげにさしのべし
わが魚のごとき手に雪はしたしや

京都にて

にほやかに恋ひぬれど
さめゆくものはつめたかり

わが心は哀憐(あいれん)にみちわたり
もののそよぎに泪(なみだ)おちむとす

雪の青きを手にとれば
雪は哀しくなじみまつはる

かばかりふかき哀憐のもよほしに
いまぞ涙ことごとく流れもいでよ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com